NY エッセイ 65

中瀬有紀

舞踊から見る歴史

© Rosalie O'Connor

芸術監督ローレンス・ロドス氏のもと、ユリ・キリアンの『詩篇交響曲』を踊るジュリアードの生徒達

なぜ素晴らしい舞踊は観客の心を揺さぶり涙を誘うのか。今年3月に開催されたジュリアード・スクールの舞踊レパートリー公演にて、久しぶりにその感覚を抱きました。舞踊部門に在学中の大学1年生から4年生の生徒約72名が課された演目は、20世紀の西洋舞踊を代表する振付師のうちの3名、ポール・テイラー、ジェローム・ロビンズとユリ・キリアンの代表作です。才能と努力の賜物であるジュリアードのダンサー達が歴史に残る名作をあたかも初演のような興奮で魅せる公演に、私はアシスタント照明スーパーバイザーとして参加しました。

私をその制作チームに招いてくださったのは、ジュリアードの舞踊とオペラの公演に照明デザイナーとして1995年から携わり、新しい作品の制作から古典の復活、また生徒の教育に取り組んできたクリフトン・テイラー氏でした。彼はニューヨークを拠点に世界で活躍する舞台芸術家です。日本においても、コンテンポラリー・ダンスと能という異種を併合させる試みで演出家兼振付家のルカ・ベゲッティ氏とのコラボレーションが、横浜能楽堂にて2017年秋に予定されています。テイラー氏は今回の公演でも照明スーパーバイザーとしてプロダクションをリードし、名作の復活に息を吹き込む重要な役割を担っていました。

アメリカの舞踊公演において非常に興味深く感じるのは、制作者達が歴史を重んじる点です。シェークスピアやワーグナー作品の再演とは異なり、20世紀と21世紀に生まれた舞踊作品の再演は初演に忠実であることを求められます。それは振付家の意図だけにとどまらず、美術、照明、衣装を含むすべてであり、時代をさかのぼって人が何を観て何を舞踊に託したのかを探る試みです。したがって、今回上演された3作品も初演の照明デザインを忠実に復元することを目標とし、3つの異なる照明図面を一度に吊りこむこととなりました。

初演時のデザインを元に制作された資料を参考にテイラー氏によって再現された今回の照明図面には、初演当時には存在しなかった器材を含みます。たとえば、1985年初演のポール・テイラー振付『薔薇』は、ジェニファー・ティプトン氏によって照明デザインされ、アルトマンの360Qエリプソリダルが使用されていましたが、現在のアメリカ照明業界で最も多く使用されているエリプソリダルは1992年にETCが生んだソースフォーです。レンズとランプの改良により、より明るく「白い」（EHFランプは3,200°Kに対しHPLランプは3,265°K）ソースフォーで30年前の灯りを再現するには、資料に忠実であるだけでなくティプトン氏が目指していた明かりを感じ取る必要があります。さらに、白熱電球からLED電球への移行の真っただ中にある2016年の今、「明度と鮮度のバランスで語り継がれてきた20世紀の照明デザインを、LED照明器材を使用して現行の照明卓とテクニカル・リハーサルの時間内に再現することは、非常に難しい」と話すのはテイラー氏です。

ジュリアード・スクールの舞踊レパートリー公演で発表される舞踊作品のそれぞれ約30分間が、生徒達にとって有意義な挑戦であると同時に、ニューヨークの観客にとって心洗われる観劇体験となるため、制作者達が費やしてきた時間は計り知れません。彼らの舞踊に対する情熱が舞台上のダンサーの体からひしひしと伝わってくる、そんな公演でした。